中村敬宇における「敬天愛人」の思想

藤　原　　暹・平　野　尚　也

はじめに

「敬天愛人」の思想研究については，西郷南洲の遺訓やその書にみられる「敬天愛人」の四字熟語が何に由来するのかを問う事によって諸説が展開されてきている。その中で注目されるのは井田好治氏，藤原暹氏，小泉仰氏の諸説である。井田氏は中国・清初における典礼論争下問題化した用語であって，日本での使用はそれの影響によろうとする。(「敬天愛人の系譜―南洲と敬宇と康熙帝」『明治村通信 155』博物館明治村　昭和 58)

藤原暹氏は幕末の思想家鶴峰戊申には明治の「敬天愛人」に連なる用例が発見され，その思想内容においてもすでに明治開化期に先立ってキリスト教の影響もあって成立していたという。(昭和 61 年度日本思想史学会大会発表於東海大学)

更に，小泉仰氏は江戸期以来の儒学の伝統，例えば貝原益軒の思想（『自娯集』）と新しく導入したキリスト教の思想の融合したものとの見解を説いている。(『中村敬宇とキリスト教』北樹出版 1991)

本稿は小泉説に誘導されながらも，益軒の別の材料をベースにしてなされた敬宇の思想構築ではなかったかと考え，それを論証しようとした。

第一節　『敬天愛人説』上篇にみられる儒教の伝統

中村敬宇は明治元年，『敬天愛人説』という漢文章を執筆した。これはキリスト教の「神」を儒教の「天」によって理解しようと試みた所産である。上下の二篇に分かれ，上篇は儒教の伝統に基づく「敬天」思想と「愛人」思想が述べられ，下篇は「敬天愛人」という言葉で新しい思想が展開されている。小泉仰氏は「儒学の伝統の中の敬天と愛人の思想は，敬宇の主張したような敬天愛人という統一的成句としては存在していなかったが，儒学の伝統の中で別々に成立していた。つまり，近世日本の思想の流れの中に，敬宇の精神において神への愛と隣人への愛というキリスト教的理念に共鳴する理念的基礎がすでに存在していたということができる」[1] と述べ，主に儒教の文脈のなかに敬天と愛人の思想を探っている。その人物を挙げれば林羅山・貝原益軒・中江藤樹・荻生徂徠・細井平洲・広瀬淡窓・尾藤二洲・頼杏坪・佐藤一斎とあり，ほとんどが敬天思想を中心に考察している。

敬宇の「敬天愛人説　明治戊辰」と題された上篇は，『書経』・『詩経』・『論語』・『孟子』・朱子・薛文清・貝原益軒・程子・『西銘』・真西山といった儒教の文献や儒者の語が数多く引かれている。ところがその中に日本の儒者は貝原益軒のみである。その部分を引用してみる。

---

1)　小泉仰著『中村敬宇とキリスト教』二九頁，北樹出版，1991 年。

貝原益軒曰く，或るひと問ふ。儒者一生の事業，平日の工夫，如何。曰く，天に事へるのみ，と。天に事へるの道如何。曰く，仁のみ，と。仁を爲すの道如何。曰く，心を存し性を養ふは，仁の體立つ所以なり。人物を愛育するは，仁の用行はる所以なり。乃ち天に事へる所以なり，と[2]。

小泉仰氏はこの典拠を『自娯集』と注記している。益軒の事天思想が『自娯集』によくあらわれているとの内容から下された判断であろうが，実はこれは『初学知要』からの引用である。以下，敬宇の「敬天愛人説上明治戊辰」と益軒の『初学知要』を対照させて引用する。

中村敬宇「敬天愛人説上明治戊辰」[3]

①仲虺の誥に曰く，欽んで天道を崇め，永く天命を保つ，と。

②説命に曰く，明王天道を奉若す，と。

③詩に曰く，天の怒を敬み，敢て戲豫する罔れ，と。

④孟子曰く，其の心を存し，其の性を養ふ。天に事へる所以なり，と。

⑤張子曰く，乾を父と稱し，坤を母と稱す，と。

⑥朱子曰く，古の聖賢を見るに，朝夕只那天の眼前に在るを見る，と。

⑦薛文清曰く，天地は吾が父母なり。凡そ行ふ所有らば，則ち吾が父母の命に順ふを知らんのみ，と。又曰く，天を敬すの心，瞬息も敢て怠らず，と。又曰く，天を敬すは當に吾が心を敬すより始むべし。其の心を敬すこと能はずして能く天を敬すと謂ふは妄なり，と。

⑧或ひと問ふ。儒者一生の事業，平日の工夫，如何。曰く，天に事へるのみ，と。天に事へるの道如何。曰く，仁のみ，と。仁を爲すの道奈何。曰く，心を存し性を養ふは，仁の體立つ所以なり。人物を愛育するは，仁の用行ふ所以なり。乃ち天に事へる所以なり，と。天を敬するの説，蓋し此の如し。

⑨樊遲仁を問ふ。子曰く，人を愛す，と。

⑩魯恭曰く，萬民は，天の生ずる所なり。天の其の生ずる所を愛すは，猶ほ父母の其の子を愛するがごとし。一物も其の所を得ざる有らば，則ち天氣之の爲に舛錯す。故に民を愛する者は，必ず天の報有り，と。

⑪程子曰く，一命の士，苟くも心を愛物に存せば，人に於て必ず濟ふ所有らん，と。

⑫西銘に曰く，民は吾が同胞，物は吾が與なり。凡そ天下の疲癃残疾，惸独鰥寡，皆吾が兄弟の顚連して告ぐる無きなり，と。

⑬眞西山云く，政を爲す者は，當に天地の萬民を生ずるの心と，父母の赤子を保つの心とを體すべし。一毫の慘刻有るは，仁に非ず。一毫の忿疾有るも，亦仁に非ず，と。

⑭薛文清曰く，鄕人に處すは，皆當に敬して之を愛すべし。三尺の童子と雖も，亦當に誠心を以て之を愛すべし。侮慢す可からざるなり，と。人を愛するの説，蓋し此の如し。

貝原益軒『初学知要』[4]

①′仲虺の誥に曰く，欽んで天道を崇め，永く天命を保つ，と。

②′説命に曰く，明王天道を奉若す，と。

2）「敬天愛人説」，『明治文学全集3　明治啓蒙思想集』所収，二八〇頁，筑摩書房，昭和四十二年。

3）同上，二八〇～二八一頁。

4）『貝原益軒』下巻所収，日本図書センター，昭和五四，三九一～三九二，四一〇，四一九～四二〇頁。

④′孟子曰く，其の心を存し，其の性を養ふ。天に事へる所以なり，と。

⑥′朱子曰く，古の聖賢を見るに，朝夕只那天の眼前に在るを見る，と。（篤信謹んで案ずるに，古の聖賢天を畏れ奉若するを專一す。尚書に於て最も見る可し。）

⑦′薛文清曰く，天地は吾が父母なり。凡そ行ふ所有らば，則ち吾が父母の命に順ふを知らんのみ。其の他を恤むは遑なり，と。又曰く，天を敬すの心，瞬息も敢て怠らず，と。又曰く，天を敬すは當に吾が心を敬すより始むべし。其の心を敬すこと能はずして能く天を敬すと謂ふは妄なり，と。

⑧′或ひと問ふ。儒者一生の事業，平日の工夫何事なり。予之に答へて曰く，天に事へるのみ，と。天に事へるの道を請問して曰く，仁のみ，と。仁を爲すの道奈何。曰く，體用の別有り。心を存し性を養ふは，仁の體立つ所以なり。人物を愛育するは，仁の用行ふ所以なり。是れ皆仁を爲すの事にして天に事へる所以なり，と。

⑨′樊遲仁を問ふ。子曰く，人を愛す，と。

⑩′魯恭曰く，萬民は，天の生ずる所なり。天の其の生ずる所を愛すは，猶ほ父母の其の子を愛するがごとし。一物も其の所を得ざる者有らば，則ち天氣之の爲に舛錯す。故に民を愛する者は必ず天の報有り，と。

⑪′程子曰く，一命の士，苟くも心を物を愛するに存せば，人に於て必ず濟ふ所有らん，と。

⑬′眞西山云く，政を爲す者は，當に天地の萬民を生ずるの心と，父母の赤子を保つの心とを體すべし。一毫の慘刻有るは，仁に非ず。一毫の忿疾有るも亦仁に非ず，と。

⑭′薛文清曰く，鄕人に處すは，皆當に敬して之を愛すべし。三尺の童子と雖も，亦當に誠心を以て之を愛すべし。侮慢す可からざるなり，と。又曰く，人の微賤に於ては，皆當に誠敬を以て之に待り，忽慢す可からず，と。

若干の違いはあるがほぼ同じ文章と考えられる。『初学知要』は益軒が元禄十年六十八歳の時に成り，初学者の為に古人の格言を選録して注釈を加え，為学，修身，接物，処事，警戒の五項に分ち説ける書である。①′・②′・④′・⑥′・⑦′・⑧′は中巻の修身の項の「事天」，⑨′・⑭′は下巻の接物の項の「愛敬」，⑩′・⑪′・⑬′は「愛人」と配列もほぼ順番通りになっている。『初学知要』には見いだせない三つの文章の内，⑤と⑫は益軒の言葉として『五常訓』巻之二にみることができる。

天地ヲ父母トシテ，ワガ身ハ天地ノ子ナリ。天下ノ民ハ，ワレト同ジク，天地ノ子ナルユヘニ，即是ワガ兄弟也。其内ニ王公・大人アリ。是ワガ兄弟ノ内ニテ，位タカキ人ナリ。鰥寡・孤独・病者・カタワ・乞食・貧人アルハ，皆ワガ兄弟ノ内ニテ，不幸ナル人ナリ。有位ヲウヤマヒ，不幸ナルヲアハレムハ，皆是ワガ兄弟ヲアツクシタシムノ道ニシテ，即是天地ニツカフマツル道也[5]。

⑤は張子，⑫は『西銘』となっているが，この両者は張横渠の『西銘』からの引用である。上述の『五常訓』や『初学知要』の上巻の「読書」で「仁を存し天に事へるの主意，西銘を以て據と爲す可し。」[6]，『慎思録』巻之一で「西銘天地を以て父母と爲し，萬物を以て一體と爲して，天地に事へるの道を發明すること親切と爲す。學者須らく先ず此の理を知り，身を終まで服膺せしめ失ふこと無かるべし」[7] と言うように益軒は『西銘』を重視していた。にもかかわら

5）『貝原益軒　室鳩巣』所収，日本思想大系 34，岩波書店，九八頁。
6）前掲『貝原益軒』下巻所収，三七二頁。
7）同上，七頁。

ず敬宇が『初学知要』に『西銘』そのものの語を直接に引用できなかったのは，益軒の言葉として語られていたからである。

神篤信竊に案ずるに，君子一生の心を立つは，全く天地に事へるに在り。蓋し能く父母に事へるを孝と爲し，能く天地に事へるを仁と爲す。夫れ天地を以て大父母と爲して之に事へ，萬物を以て一體と爲して之を愛す。張子の西銘は，此の道理を發明する所以なり。宜しく玩味して之を體認すべし[8]。

このようにみてくると『敬天愛人説』上篇において敬宇が論述したことは益軒に拠っていることが明らかになった。

第二節　中村敬宇の「敬天愛人」

では敬宇と益軒の思想的連関は如何なるものであろうか。

まず『敬天愛人説』下篇の敬宇の「敬天愛人」思想において考察する。

敬宇は慶応二年十月からおよそ一年半の間，諸学研究を目的とする幕府派遣の英国留学生の取締としてイギリスに留学をした。そのときの見聞を『自叙千字文』（明治16年）で「眞神を虔奉し，紀綱を振整し，徳善は慫恿し，姦惡には隄防たり。鰥寡孤獨，盲啞顚狂の，救恤醫療に，條例は審詳なり。厥の民は活潑にて，俊偉雄剛，忍耐黽勉，鷙悍奮揚し，物に格り賾を探り，祕藏を抉摘し，實驗を崇尚し，毫芒を分析す。」[9] と述べているように，この英国留学の際に自らの耳目でキリスト教に触れ，その果たしている役割を直感したと考えられる。前田愛氏は「ヴィクトリア朝の制度文物を黙殺した代償に，『唯一真神』への敬虔な信仰がそれら一切の基調をなしているという直截な認識を獲得した」[10] と指摘している。つまり敬宇は当時繁栄を極めていたイギリスの隆盛の根本原因は，それを支える国民のキリスト教精神にあり，キリスト教は西洋文明の精神であると看破したのである。

高橋昌郎氏はこうした敬宇の留学中に得たキリスト教観を「日本における初代キリスト教徒の多くは，維新の大変革に遭遇し，新日本建設の倫理を求めて入信したのであるが，敬宇は幕府滅亡以前にあって，彼の理想国イギリスの根底をなすものとしてのキリスト教に魅せられた」[11] と別様に評価している。

明治元年六月に帰国して間もなく，敬宇は駿河府中に転封された徳川亀之助の後を追って静岡へ移住した。敬宇ら英国留学の途中帰国は大政奉還による幕府瓦解のためであった。この静岡に到着した明治元年九月から，新政府に招かれ明治五年夏に再び東京へ移るまでの時期は静岡時代と呼ばれている。同年十月に静岡学問所が開校され，敬宇はその一等教授に任命されるが，自身『自叙千字文』でこの静岡での生活を「靜岡に遷住し，菜を種へ畦に潅ぐ。農樵席を爭ひ，鷗鳥猜ひ無し。芙蓉牕に當り，著述扉を掩ふ。」[12] と述懐している。前田氏は敬宇に帰農の計画があったかもしれないと推論し，その心境について「勤倹を説き立身出世を鼓舞した家

8）同上，三九二頁。
9）前掲『明治啓蒙思想集』所収，三四四頁。
10）前田愛氏「中村敬宇」，『文学』三十三巻十号，六二頁，岩波書店，1965年。
11）高橋昌郎著『中村敬宇』五〇頁，吉川弘文館，昭和四十一年。
12）前掲，三四四頁。

君の訓えを奉じて，精励刻苦，同心の子弟から昌平黌教授にまで累進した敬宇であったが，幕府瓦解に引きつづくこの逆境時代にはさすがに『名心ノ灰滅』を自覚しなければならなかった。」[13] と言う。しかし敬宇の思想上の意義からすると，「この不遇なりに牧歌的な静岡時代は敬宇の思想を成熟させ，世界観の暗転をもたらした注目すべき一時期」[14] と評価され，「敬宇の内面ではキリスト教の教義に儒学の体系を接合させる思想体験が徐ろに進行」[15] し，「多年研鑽を積んだ儒学の論理を駆使して，英国留学の体験を整理し，把握しなおすこと」[16] がおこなわれていたのである。

こうして留学体験で得たキリスト教を理解しようと試みた最初の成果が『敬天愛人説』（明治元年）と『請質所聞』（明治二年）なのである。『敬天愛人説』は数ケ月という短期間で執筆され，『請質所聞』は思いつくままに文章を列記した形のものではあるが，それだけに新鮮に英国での印象を伝えていると思われる。

下篇のはじまりの部分を引用する。

> 天は，我を生ずる者，乃ち吾が父なり。人は，吾と同じく天の生ずる所と爲す者，乃ち吾が兄弟なり。天其れ敬せざる可けんや。人其れ愛せざる可けんや[17]。

天は我と人を生んだ父であり，我と人とは同じ父によって生まれた兄弟であるが故に，天を敬し，人を愛することが述べられている。これが敬宇の「敬天愛人」の基本的な性格である。この文章の後に「何をか天を敬すと謂ふ」[18]，「何をか人を愛すと謂ふ」[19] と，前半で敬天思想，後半で愛人思想を説くという上篇と同じ構成がみられる。

小泉氏は『敬天愛人説』の特質を六つ指摘している。この引用文に関連した内のひとつに「天と人間との関係は，天が人間を生んだ父であるという意味で，創造神的，人格神的性格を持っている。」[20] とある。その理由は「天は理の活者」という朱子学における天即理，理一分殊とは違った天の考えを，未だ不明確ながら『敬天愛人説』のなかに認めているからである。実際には翌年に書かれた『請質所聞』にこの解釈がはっきり出てくると証拠立てている。つまり敬宇のいう天を「朱子学者のいうような自然法則的原理と道徳的原理の両面を背中合わせに抱えもった非人格的原理ではない。」[21] と判断したからである。

「天は理の活者」という部分を引用する。

> 蓋し天は理の活者なり。故に質無くして心有り。即ち生を好むの仁なり。人此れを得て以て心と爲す。即ち人を愛するの仁なり。故に仁を行へば，則ち吾が心安かにして天心喜ぶ。不仁を行へば，則ち吾心安かならずして天心怒る[22]。

13）前掲前田氏，六二頁。
14）同上。
15）同上。
16）同上。
17）前掲，二八〇頁。
18）同上。
19）同上。
20）前掲小泉氏，四〇頁。
21）同上。
22）前掲，二八〇頁。

約言すると，天には心があり，人はそれを得て心としている。天の心とは生を好むという仁であり，人の心とは人を愛するという仁のことである。ここで敬宇は儒教の「仁」によってキリスト教の造物主としての神を理解しようとしていることが窺える。人の心にあっては人を愛する仁という用例は体用論であるが，その際に緩急が設けられておらず理一分殊の考えは見られない。

推考するに，天が人を生み，人が人を愛するという仁を根拠にした論理展開は益軒の場合と近似している。理一分殊に関しては益軒にもみられるが，それ以上に『西銘』に基づく万物一体の仁をよく身につけ，人を天地の子として等しく愛する側面があったのである。

小泉氏の指摘にある創造神的，人格神的性格というのは，『敬天愛人説』の目的から勘案してキリスト教の神の超越性を指すものと解することはできよう。しかしこの二つの性格を指摘する際の理由は，益軒との関わりを考えたとき，必ずしも整合的であるとは言えないのではないか。なぜなら小泉氏はこうした天を「中江藤樹の皇上帝に近く，またキリスト教の神観に近い。」[23] とも指摘しているように，陽明学との対照で導きだしている。けれどそれはこの段階においてはあまり明確に読み取ることはできないものである。一方で益軒は理気一体説や天地を擬人化した把握，宗教的性格など，朱子学とともに陽明学的な要素をも孕んだ儒教の文脈に位置していた。キリスト教の神にみられる創造神的，人格神的性格の存否からよりも，敬宇がこうした益軒の儒教の伝統に着目して改めてそうした性格を重ね合わせた過程から敬天愛人の「天」に超越的性格をみる方が適当であろう。

陽明学的な影響を予想させるのは次の部分である。

> 古より善人君子，誠敬を以て己を行ひ，仁愛を以て人に接す。境地の遇ふ所に随ひ，職分の當然を盡し，良心の是非を原ね，天心の默許に合せんことを求む[24]。

また敬宇は天について，

> 天は形無くして知有り。質無くして在らざる所無し。其の大は外無く，其の小は内無し。人の言動，其の昭鑒を遁れざるを論ずる勿れ。乃ち一念の善惡，方寸に動く者も，亦其の視察に漏れず[25]。

と述べている。このように『敬天愛人説』で天を存在論的に論じているのはこの部分のみであり，この天には人格神的性格はみられない。小泉氏はこうした天を特質のひとつに挙げ，その特色はウィリアム＝マーティンの『天道遡原』(1854年) の影響を強く示唆していると指摘している。最終的に小泉氏は『敬天愛人説』では天の超越的性格は，「人を生んだ父としての創造者的性格を除けば，それほど強く出ていない。」[26] と結論する。

小泉氏の指摘する第二の特質に「敬宇の云う神人関係は，儒学的血縁関係であり，契約以前の関係を含み，儒学的文脈を離れることはなかった。」とある。これは敬宇の把握が「あくまで儒学的な家と父子関係から見る考え」で，キリスト教の「契約による義父義子の関係」ではな

---

23) 前掲小泉氏，四一頁。
24) 前掲，二八〇頁。
25) 同上。
26) 前掲小泉氏，四三頁。

いことによる[27]。

「敬天愛人」の基本的性格において天と人との関係は，小泉氏の指摘にある如く，およそ儒教の枠組みを出ていないが，天は人を生んだ父という意味でキリスト教の神に近い創造神的性格を持っていると考えられる。つまり敬宇は明らかに「敬天愛人」の天を宗教的な対象と捉えているのである。

敬宇はこのような天を構想してさらに天を敬し，人を愛することを言う。天はキリスト教の神を意識した宗教的なものであるから，天に向けられた敬天，天を基にした兄弟への愛人という行為は宗教的な意味合いを強く含んでいると解することができる。

下篇の最後で敬宇は次のように述べている。

> 或るひと曰く，天豈愛す可からずや。人豈敬す可からずや。曰く，敬愛，相離る可からず。天は人より尊きなり。故に敬を主と爲して愛其の中に在り。人は，我と同等なり。故に愛を主と爲して敬其の中に在り[28]。

このように『敬天愛人説』で敬宇は儒教の「愛敬」を用いてキリスト教の神人関係を理論付けようとしているのである。そしてここには儒教の文脈にはない新しい意味を付された「愛敬」が示されている。それは愛と敬をそれぞれ別個に分けるのではなく，まさに愛敬渾然とした形で為すというものである。人より尊い天に対しては愛を含んだ敬を為し，自分と同等の人に対しては敬を含んだ愛を為す。天にも人にも愛敬を為すのだが自分との関係の別によって主宰が設けられているのである。儒教の文脈に天を愛し，人を敬すという用法は見当たらない。こうした相互連関的な方向性を持つ愛敬をキリスト教の神人関係に置き換えてみると，敬天は神である父への愛，愛人は兄弟への愛という隣人愛を指すと考えられる。そして「何をか人を愛すと謂ふ。天を敬す。故に人を愛す。吾が同胞を愛すは，吾が父を敬するに由る。」[29] と述べるように，神への愛が隣人愛に直結して「敬天愛人」という統一的な把握となるのである。このとき敬天と愛人をつないでいる紐帯が唯一神としての，または造物主としてのキリスト教の神であり，この役割においてこそ敬宇が「敬天愛人」を提出した所以がある。

敬宇は敬天思想を「天を敬するは，徳行の根基なり。國に天を敬するの民多ければ，則ち其の國必ず盛り，國に天を敬するの民少ければ，則ち其の國必ず衰ふ。」[30] と総括する。敬天は徳行の根幹であり，国の盛衰を天を敬する民の衆寡に求める考えは，留学体験によるキリスト教観と合致する。敬宇は英国で人の道徳や行いなどすべての行為の準拠がキリスト教の神にあり，この神に対する敬虔な態度が文明国を支えていると感覚した。この意味において敬宇は万人に共通する道徳や行動の統一原理を志向しているといえよう。

「敬天愛人」における愛人思想は，「天を敬す。故に人を愛す。吾が同胞を愛すは，吾が父を敬するに由る。」[31] と敬天思想に根拠付けられているが，それは中心にキリスト教の神を設定しているからであり，両者に先後軽重の差はない。

敬宇はまず次のように述べる。

27）同上，四一頁。
28）前掲，二八〇頁。
29）同上。
30）同上。
30）同上。

試に思へ我一人の身，人に離れて獨り立つ者にあらず。衆人と相依るに由りて吾が生を安んずるを得るなり。今夫れ，書籍の心靈を修養する所以の者，衣食居室，百爾器用の身體を保安する所以の者，皆古今來衆人の心手に成りて我が必要の物と爲れり。則ち我が他人に由りて得る所の利勝げて言ふ可からず。我既に利を他人に受くれば，則ち我亦利を他人に施し，彼此相資け，以て福社を造らざる可からず。是れ人の天職を奉ずるの道なり。人を愛せざらんと欲するも，何ぞ得可けんや[32]。

敬宇は人が多くの人と助け合い生きていくこと，様々な利益を受けて生きていることを説いたうえで，それ故に人は自らも他人を助け利益を施すことを要請している。そしてこれが人を愛するという天職を奉じる道であると言う。この天を知らず「自私自利の念，心胸に塡塞して人を愛し他を利するの心」となるのを戒めるのである。ここにも儒教の「仁」による解釈の跡が窺える。これは愛人についてのものだけに体用論で仁の用が下敷きとされている。上述の敬天思想の場合を含め，こうした『敬天愛人説』下篇に窺える「仁」は，益軒の「仁ハ，天地ニアリテハ，物ヲ生ズルノ心也。人ニアリテハ，温和ニシテ，人ヲ愛シ物ヲ利スル心也。仁ハタヾ愛ノ理ヲ以云ベシ。天ノ道，人ノ道，皆此愛ヲ以，本トセリ。愛ヲステヽ仁ヲイフハ，非也。」[33]という愛に重心のある「仁」と同然であると考えられる。またこのような視点と論述の仕方は，調和的で，生後の天地の恩恵を強調し報恩としての事天を説いた益軒に類似しているといえよう。

「福社」を造るというのは「鰥寡孤獨，盲啞顚狂の，救恤醫療に，條例は審詳なり。」という留学体験によるものであり，こうした知見は後の訓盲院設立運動に受け継がれていく。そして愛人思想を次のように締めくくる。

蓋し民人相愛するを知れば，則ち彼此力を協せ，小大心を同うし，智は愚を恤み，强は弱を扶け，富は貧を濟ひ，衆は寡を暴げず，邦國一家の如くして福利崇し。民人相愛するを知らざれば，則ち自ら己を私するに務め，他人を恤まず，互に相訕謗し，各の私黨を立て，邦國蕩散し，而して禍基成る[34]。

個々人の愛人が「家」に例えられた国全体につながる問題に意図されている。敬天思想におけるが如く，条例や制度の背景にあるキリスト教や人々の信仰心という留学体験によるキリスト教観が愛人思想でも窺えるのである。

『敬天愛人説』において敬天思想と愛人思想の両方が国と関係付けて要請されていた。これは英国留学の体験に根差すものだが，こうした傾向は，やはり静岡時代に訳述された『西国立志編』の「書西国立志編後」においてより如実にみることができる。言うまでもなく『西国立志編』はサミュエル＝スマイルズ著の『セルフ・ヘルプ』(Self-Help；1858) を翻訳したもので，明治三年頃から訳し始められた。また敬宇に「敬天愛人」という用例がみられるのは『敬天愛人説』と次の部分においてである。

前年英都に遊び及び，留まること二載，徐ろに其の政俗を察し，以て其の然らざるを知る

32) 同上。
33) 前掲『貝原益軒　室鳩巣』所収，一〇〇頁。
34) 前掲，二八〇頁。

有り。今の女王は餳を含んで兒孫を弄するに過ぎざるのみ。而して百姓議會の權最も重く，諸侯議會之に亞ぐ。其の衆に掄ばれ，民委官と爲る者は，大抵學明らかに行修まれるの人なり。天を敬し人を愛するの心有る者なり。己に克ち獨を愼むの工夫有る者なり。多く世故を更へ，艱難に長ずるの人なり。而して權詐猥薄の徒は與らず。其の俗は則ち上帝に事へ，禮拜を尊び，持經を尚ひ，好んで貧病者を賙濟す。國中設くる所，仁善の規法，殫く述ぶるに遑あらず[35]。

敬宇は英国で観察した政治と風俗から為政者に「天を敬し人を愛するの心」，国民に「上帝に事へ，禮拜を尊び，持經を尚ひ，好んで貧病者を賙濟」するキリスト教精神をみている。この引用文の前に，「君民一體，上下同情，朝野好みを共にし，公私別無し。國の昌盛なる所以は，其れ此れに由らざらんか。」[36] という西洋の国の盛衰に関する記述がある。

そして引き続き次のように述べる。

余又近ごろ西國古今の雋傑の傳記を讀み，其の皆な自主自立の志有り，艱難辛苦の行有り，天を敬し人を愛するの誠意に原き，以て能く世を濟ひ民を利するの大業を立つるを觀る。益す以て彼の土の文教昌明，名四海に揚がるは，實に其の國人勤勉忍耐の力に由り，而して其の君主は得て與からざるを知る有り。蓋し世人余が此の譯書を讀まば，則ち西國昌盛の故憬然たる可けん[37]。

敬宇は西洋の人々が「天を敬し人を愛するの誠意」に基づいて「能く世を濟ひ民を利するの大業を立つ」という。つまり帰国後の『敬天愛人説』における敬宇のキリスト教理解とは英国で見聞した「敬天愛人」そのものを理解することが主要目的であったといえよう。その意味で『敬天愛人説』は実践的見地で神人関係が論じられており適当である。キリスト教理解がほとんど不十分で，影響がみられる程度であることもうなずける。実際に敬宇がキリスト教理解を深めていくのは明治四年十月以降のE＝W＝クラークとの交際が始まってからである。

敬宇は明治元年四月，ロンドンを去り帰国する際に友人のH＝U＝フリーランドからスマイルズの『セルフ＝ヘルプ』を贈られた。帰国する船の中で敬宇はこの書を繰り返し愛読し，その半ばを暗誦するにいたったという。訳述をおこなうのは明治三年からであるが，船中での熱読振りを考えると『敬天愛人説』の頃にはまだ強い印象が残っていたと予想される。『セルフ＝ヘルプ』は敬宇の「自助論第一編序」に「斯邁爾斯（スマイルス）曰く，國の强弱，人民の品行に關る，と。又曰く，眞実良善，品行の本爲り，と。」[38] とある如く，敬宇が得た英国での知見と同じような内容を含んでいた。またスマイルズ自身の宗教的信仰心の篤いことから「英米の市民社会におけるピューリタン的・実践的道徳の原則」[39] を持つものであった。

『敬天愛人説』を執筆した理由は英国留学の体験に起因している。敬宇は英国の人々の神に対する敬虔な信仰とそれに根差した高い水準の道徳，貧病者や恵まれない人への慈善などの風俗をみた。そしてこれらがすべてキリスト教の神に準じて為されているとの認識から「唯一神」としての神を理解しようと志向していくのである。『敬天愛人説』はこうした英国留学の体験そ

35）前掲『明治啓蒙思想集』所収，二八六頁。
36）同上。
37）同上。
38）前掲『明治啓蒙思想集』所収，二八三頁。
39）前掲高橋氏，七三頁。

のものを儒教によって解釈しようと試みた所産である。敬天と愛人という実践的見地からの言説やそれらが国の盛衰と関係付けられていること,「敬天愛人」という統一成句を可能ならしめたものなどに留学体験による観察が窺える。キリスト教の理解が不十分であることも逆にその証左となろう。またこうした留学体験自体の重要性で論じるまえに,帰国して数ケ月で為された最初の成果であることから,時間的に十分なキリスト教の知識を得られなかったのではないかと推論する。また留学体験と『敬天愛人説』の間にスマイルズの『セルフ＝ヘルプ』を熱読していることも,その印象を保持させるという意味で多少の作用が予想される。

恐らく敬宇はキリスト教の神という一個の統一原理が,人民や延いては文明国の英国を支え動かしていることに驚異したに違いない。敬宇は留学前に「人倫の學,政事の學,律法の學等彼邦ニて專要と講求」[40] するという考えを持っていたが,哲学や宗教については「日本の精神的支柱にはなりえず,東洋には独自の精神と道徳がある」[41] という考えであった。その両者が不即不離の関係にあることを直に発見したのである。こうした前後の食い違いの反動も相俟って敬宇は英国を理想化し,キリスト教に接近し,新たに儒教を読みかえていったのである。

『敬天愛人説』に窺えるキリスト教の要素は,神の創造者的性格,神への愛,隣人愛の三つであった。これらを勘案すると,ここで敬宇が儒教によって解釈しようと試みているのはキリスト教の「愛」であるといえる。留学体験の記述に「鰥寡孤獨,盲唖顚狂の,救恤醫療に,條例は審詳なり。」とか,「上帝に事へ,禮拜を尊び,持經を尚ひ,好んで貧病者を賙濟す。國中設くる所,仁善の規法,殫く述ぶるに遑あらず。」とある如く,敬宇は英国に貧病者や恵まれない人々を救済する法的整備のあることを見聞した。これは後に明治八年に開始した訓盲院設立の運動へと具現化されているように,敬宇にとって重大な知見のひとつであったといえる。こうした法制度の基調となっているものはキリスト教の博愛の精神であり,隣人愛である。これらは同時に神への愛を内包している。この観点が『敬天愛人説』においてのキリスト教と儒教の要衝となっているのである。

『敬天愛人説』上篇が益軒の『初学知要』からの転載であることは既述した。つまりこれの意味する所は,神への愛や隣人愛というキリスト教の「愛」を益軒によって解釈しようと試みたということである。漢学の知識が豊富で昌平黌の教授にまでなった敬宇が,数ある儒教の文献や儒者の言説のなかで,敢えて益軒に解釈を求めた理由は,益軒が「事天」と「愛人」を連続して説いているなど色々あるが,その根幹に『西銘』に基づく「万物一体の仁」思想を見いだしたからと考えられる。キリスト教世界は唯一神の神のもとに全人類が平等であるという神人関係を形成し,また神が世界の創造主であるという考え方がある。これらを前提に説かれているキリスト教の「愛」は,儒教の理一分殊による差等のある愛の説とは相いれないものであった。しかしその儒教にあってなお「民は吾が同胞,物は吾が與なり」という水平的な同胞愛を説く『西銘』があった。敬宇はその万物一体の仁に隣人愛を重ねてみたのである。

上篇の敬天と愛人の解説にそれぞれ一箇所づつ『西銘』の文章がある。敬天の部分には「乾を父と稱し,坤を母と稱す」,愛人の部分には「民は吾が同胞,物は吾が與なり。凡そ天下の疲癃残疾,惸独鰥寡,皆吾が兄弟の顚連して告ぐる無きなり」とある。しかしこれらは『初学知要』から直接に抄出したものではない。ここで益軒は『西銘』について縷説しているが原文を引用してはいないのである。故に敬宇が自分で原文をとったと思われる。また『請質所聞』にも『西銘』原文から半分くらいの引用がみられる。

---

40) 前掲『明治啓蒙思想集』所収,二七九頁。
41) 前掲小泉氏,一七〜一八頁。

下篇の愛人の部分で「天を敬す。故に人を愛す。吾が同胞を愛すは，吾が父を敬するに由る。」とある。この「同胞」という語は『西銘』からの借用である。上篇の引用も当然原文であるから「同胞」なのだが，益軒の場合「兄弟」と訳していた。どちらも語義は同じであり，この違いは単に敬宇が原文を参照したからというだけなのかもしれない。しかしこの『西銘』をめぐって敬宇と益軒の連関性を推考するに，益軒は儒教道徳と民衆の間に生きていた習俗を接合し，普遍化しようとしていた。そのとき敢えて民衆にわかりやすい言葉として「兄弟」と訳したのかもしれない。こうした益軒の態度を敬宇はみたのではないだろうか。敬宇の場合はキリスト教と儒教とであり，明治二十二年には「古今東西一致道徳ノ説」を発表する。また儒教を読むとき益軒は日本にあるもので基礎付けている。功利的な学問観・宗教観の敬宇と共通するであろう。

益軒の「愛人」思想は『西銘』原文の性格をそのまま受け継いで，それに基づく「万物一体の仁」と儒教の前提の差等のある愛の二つの側面が併存していた。こうした儒教の上下の秩序のなかで，人格の尊重を「天地の子」という平等の関係に置換して人を愛することを益軒は説いたのである。敬宇はこの後者の状態のみに着眼して，キリスト教の「愛」を解釈しようとした。

また敬宇がキリスト教の「愛」に着眼したことを示すものに「自由之理序」が挙げられる。

敬宇は静岡時代の明治五年にJ＝S＝ミル著の『自由論』(On Liberty；1859）の翻訳書『自由之理』を刊行した。翻訳は明治四年のうちになされていた。この書も『西国立志編』と同様に大きな反響を及ぼし，特に「明治初期の自由民権運動のバイブルの一つ」[42] になったという。この序文は「愛に限量有る可からず」[43] という愛を主題にして『敬天愛人説』と同様な言説がみられる。敬宇は「夫れ愛限量有る可からず。上帝人を愛す。限量有る無し。故に人亦當に上帝を愛し人を愛するは，限量有ること無かるべし。」[44] という。ここではキリスト教の神を「天」ではなく「上帝」で呼び，神を愛することが明言されている。さらに「吾の靈魂と五官四肢とは，明に神の妙造に係り，永遠無彊の洪賜と爲る。審に此れを思へば，則ち自愛の心油然として生じ，君親朋友，一國の人，天下の人，皆神の造る所となること，吾と同じ。審に此れを思へば，則ち親愛の念滂然として生ず。」[45] と，造物主としての神が理解されていることが窺える。この造物主としての神を理解できたことが，神への愛と隣人愛の理解を明瞭にしている。また「開化の民，眞正に自愛す。故に亦眞正に人を愛す。自愛の心と人を愛すの心とは，獨り並行して悖らざるのみにあらず，實に相須ちて以て生長す。」[46] と，自らを愛することと共に隣人愛が理解されている。明治五年前後には『敬天愛人説』に比べて，このようにキリスト教理解が深まっていたのである。つまり「敬天愛人」と同じ枠組みでありながら儒教の「天」や「仁」を用いずに，「愛」をもってキリスト教の神人関係が理解されていたのである。

42）同上，六七頁。
43）前掲『明治啓蒙思想集』所収，二八七頁。
44）同上。
45）同上。
46）同上。

付記

以上第一節，第二節は平成5年入学岩手大学人文社会科学研究科日本文化論専攻の平野尚也君が提出した修士論文の一部分第二章に当たる。修士論文の口述試験の際に，菊田紀郎教授，深澤秀男教授から本論文の内容が評価されると共に，早い機会に公表しておくようにとの助言があり，ここに掲載させて戴く事にした。

第一節では小泉論文において敬宇の「敬天愛人」は江戸時代の儒学の系譜上にありながら形成されたもので，益軒の『自娯集』の引用も見られるとの指摘に対して，それは『自娯集』ではなく『初学知要』他からの引用である点を実証した。更に第二節ではそれを踏まえて，益軒の「万物一体の仁」という陽明学的な受け止めの上に「敬天愛人」は構築されてくるものであり，そこに国際諸国との交際や国内における結社を支える精神となっていく大きな特色が見られるのではないかと論じた。

今後の「敬天愛人」研究は何らかの形で平野君の実証した点を踏まえて進められていくであろう。という事は多くの課題を孕んでいるという事でもある。

ここで，その課題の全てを挙げる訳にはいかないが，例えば井田氏や藤原の研究に即して言えば次のような点が問題になろう。

井田氏の研究は中国・清朝の典礼論争において，康熙十年（1671）来清宣教師によって教会に掲げられた扁額「敬天愛人」をめぐって，その「敬天」の天が「敬天主」ではなく「敬上帝」であるべきだとして大問題になった。それが，中村や西郷のそれに影響しているのではないかという訳であるが，では何時如何にして日本に導入されたのかについては明確ではないのである。日本における典礼論争の受け止めはどのようであったのか，それと日本における陽明学の関係はどうなのか等が問題になる。（益軒に中国を介しての西洋学の影響があった事は指摘されているが……。）

また，藤原研究における幕末の西洋学の影響例としての鶴峰戊申に「敬天愛人」があり，それが開国論と結びついており，西洋諸国の富国の基礎にキリスト教の精神が発見されていたことは後に中村が受け止めたものと比較してどのような関係にあるのかというような事も問題になろう。更に，藤原研究では「敬天愛人」が問題化されていた時，同じく「敬神」が唱えられ，伝統的な神が強調されるが，そのような動きとどのように対応しているのかも問われる必要があろう。

藤原　暹